

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：84433

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13020

研究課題名（和文）近世における漆継ぎに関する基礎的研究—日本の陶磁器受容の独自性を視座として

研究課題名（英文）Fundamental Study on the Technique of Ceramic Repair Using Urushi Lacquer in Early Modern Japan

研究代表者

巖 由季子（IWA0, YUKIKO）

地方独立行政法人大阪市博物館機構（大阪市立美術館、大阪市立自然史博物館、大阪市立東洋陶磁美術館、大阪・大阪市立東洋陶磁美術館・学芸員

研究者番号：80838144

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、陶磁器の補修技法のひとつである漆継ぎに着目し、近世以降の陶磁器受容に関する文化的背景を整理しながら、その歴史的変遷の概観を試みた。特に、江戸時代中期に補修痕をもつ茶道具が注目された事象について調査を行い、茶道具の移動や茶の湯人口の増加など、同時代の茶の湯の変化に影響を受けていた可能性を検討した。研究全体を通し、陶磁器の補修が茶の湯の影響を受けて中世以前とは大きく異なる意味をもつものに発展していく過程が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、日本の陶磁史研究でこれまでにあまり重視されてこなかった陶磁器への補修について基礎的な調査を行うことにより、特に漆継ぎの歴史を概観しながら、日本の陶磁器受容の独自性を再考した。研究期間を通じ、日本国内の関連資料を調査し、現状の課題を把握することができた。今後、漆継ぎ以外の補修技法も対象に加え、補修痕跡をもつ出土遺物や補修時期の推定が可能な国外所在資料の調査を行うことで、研究の進展が見込まれる。

研究成果の概要（英文）：I focused on the technique of ceramic repair using urushi lacquer and attempted to overview its historical transition while organizing the cultural background regarding the reception of ceramics since the early modern period in Japan. Especially, I investigated the events that drew attention to tea ceremony utensils with repair marks in the mid-Edo period, and examined the possibility that they were influenced by changes in the tea ceremony of the same period, such as the movement of tea utensils and the increase in the tea ceremony population. Throughout the study, the process by which ceramic repairs evolved under the influence of the tea ceremony into something that had a significantly different meaning from that of the pre-medieval period became clear.

研究分野：美術史

キーワード：陶磁器 漆継ぎ

1. 研究開始当初の背景

漆継ぎとは、漆を用いて破損した陶磁器を繕う技法である。仕上げに朱漆や金銀粉を用いることもあり、それぞれ色漆継ぎ、金繕い(金継ぎ)としても知られる。日本においては古くは縄文時代から行われ、中近世の消費地遺跡や伝世の茶道具に見られる。東アジアから東南アジアにかけては漆を産出し工芸品に用いる地域が多いが、接着剤として陶磁器の補修に用いる漆継ぎは日本においてのみ早くから発達し、18世紀に至るまで主要な補修技法として用いられたという独自性がある。

日本における陶磁器の受容に関する研究は、生産や流通に関する研究と同様に層の厚い先行研究があるが、その中で陶磁器の補修をテーマとした総合的な研究は少なく、個別の資料を対象とした研究が行われる傾向にあった。従来の研究で補修痕のある資料が確認されてはいたが、重視されることはあまりなかったといえる。国外では、謝明良氏によって、中国、日本、ヨーロッパも陶磁器補修文化に関する研究が行われた(謝明良『陶瓷修補術的文化史』臺大出版中心、2018年)。

本研究においては、茶道具の価値形成の問題を再検討することは不可欠である。茶の湯において、茶陶の補修の有無は保有する価値を左右するほどの重要性をもち、目立つ補修を「景色」として鑑賞する価値観を共有してきたからである。よく知られている伝世品には補修に関する由来をもつ場合があるが、補修が施された年代を外観から特定することは非常に困難である。近年、補修痕のある伝世品に科学的な調査が行われ、補修技術の実態が明らかになりつつある。以上の背景から、研究開始当初には補修に関する総合的な先行研究は少ないものの、陶磁史を含む美術史や茶道史をはじめとする各研究分野の成果を援用することで陶磁器補修に関する基礎的な研究をなすことが可能であると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、16世紀以降に日本で行われた陶磁器補修について、伝世品や出土資料、文献史料の調査と分析を通して、その歴史及び様相を明らかにしながら、日本における陶磁器の受容のあり方とその特質について再考することを目的とする。本来は陶磁器の瑕疵にすぎない補修が価値継承の意味を持ち、時に「景色」と呼ばれ美的鑑賞の対象となることは日本においてのみ見られる特色であるが、その歴史的経緯や意義を明らかにした研究はほとんどなされなかった。それゆえ、文化史や考古学、文献史学等、学際的な視点も踏まえた本研究は、美術史分野における陶磁史研究において重要な意義を有すると言える。

本研究では、特に日本においてのみ早くから発達し普及した補修技法である「漆継ぎ」に着目し、わび茶が創始され完成へ向かった16世紀以降から、より簡便な補修技法である「焼継ぎ」が開始される18世紀末頃までの変遷に焦点をあて、漆継ぎの発展と普及の過程において、単なる修理ではなく、補修による価値の継承と美的意識に基づく新たな創造が生まれた時期を具体的に明らかにすることを試みる。

3. 研究の方法

(1) 文献調査

茶会記や日記等、茶の湯及び工芸に関する文献史料や、伝世の茶道具に伴う添状を調査し、漆継ぎによる補修痕をもつ陶磁器に関するデータを収集した。消費地遺跡の発掘報告書も確認し、補修された陶磁器が用いられた場や用途、目的、使用者の性格を考慮して分析を行った。調査を行う中で、18世紀前後の史料において茶道具の補修に関する記述が多く見られることがわかった。

(2) 実見調査

出土遺物を中心とする関連資料の実見調査を通して、データ収集を行った。補修が行われた時期を外観から判断することが困難であるため、補修痕をもつ伝世品よりも出土遺物を対象とする調査を優先して実施した。焼継ぎにより接着した後、金繕いに見えるように加飾した染付蛸唐草文大皿(尾張徳川家下屋敷跡出土)をはじめとする金繕いの普及状況を示す重要資料の調査を行ったほか、一部の伝世品については所蔵館での参観調査を実施した。

(3) 考察

文献調査と資料観察の結果を整理し、考察を行い、研究会等での報告を通じて、工芸分野の研究者との意見交換を行い、助言を得ることで再度整理を行った。予定していた国外の調査を行えなかったことにより、蓄積したデータは少なかったものの、国内の主要な資料については把握を進めることができた。考察を進めるにあたり、調査を行った資料がいずれも京都や大坂、江戸といった都市での受容の様相を示すものであり、陶磁器の流通や茶の湯の普及状況等の違いにより他の地域では異なる展開があった可能性が予想されたものの、研究期間内での資料調査と分析に至らなかった点を考慮し、今後の課題とした。

4. 研究成果

破損した陶磁器に施される補修は、陶磁器の受容とともに変化し、発展した。日本において古くから行われた漆継ぎは、縄文時代では土器に、中世には高級食器として使用された貿易陶磁の碗皿類に施され、補修技法として確立し、普及していた。陶磁器の補修の機能は茶の湯の影響を受けて変化し、16世紀半ば以降の茶会記には補修を目立たせる色漆継ぎが現れる。いっぽう、唐物茶入を対象とする補修痕跡を目立たせない技術も発達し、補修痕を徹底的に隠すか、あるいは強調するか、器種に応じた選択が行われていたことがうかがえる。研究の過程で、18世紀前後の史料において茶道具の補修に関する記述が多く見られることが明らかになり、重点的に調査した。出版文化の隆盛もあり、茶書を含む史料が豊富である点を考慮する必要はあるが、補修に由来する銘をもつ伝世品も複数存在することから、同時代の茶道具の移動と所有者の固定化、茶の湯人口の増加をはじめとする茶の湯の変化が補修の受容にも影響を及ぼしていた可能性がうかがえた。

18世紀前半における陶磁器補修の評価がうかがえる例として、久須見疎安による『茶話指月集』(元禄14[1701]年)における、織部が割れない茶碗をわざと欠けさせて用いたことについて良くないとする評価もあるが利休は評価していたとする記述がある。『槐記』の享保9[1724]年の項には、金森宗和作の竹花入について「黒ノ繕ヒ金繕ヒ景多シ」とあり、漆継ぎと金繕いが併用され、見どころが多いと評価されている。同書の享保12年の記録では、砧花入について「焼物ニ銚ヲ打ツコト、心得ガタキ事ナリ、景色ニテモアルベキカ」と、陶磁器への銚留め補修を批判している。「馬蝗絆」の銘で知られる青磁輪花碗(東京国立博物館所蔵)は、銚留めが施されており、付属する「馬蝗絆茶甌記」には足利義政が所持したこと、割れたため同様のものを求めて中国に送ったが、銚留めを施されて返却されたことが記されている。「馬蝗絆茶甌記」は享保12年に伊藤東崖により記され、補修により趣がもたらされていること、「馬蝗絆」の銘は補修痕跡に由来するとあり、銚留めが肯定的に評価されている。大井戸茶碗 須弥(別銘 十文字)(三井記念美術館所蔵)に付属する「十文字井戸茶碗記」も同年に記され、織部が割り、小さくしたことが記されている。さらに、『茶湯故事談』には、「雲山肩衝」について、継ぎ目が合わない古い補修を直すべきではなく、そのままにすべきであるとする小堀遠州の判断が記されている。続けて、近頃は茶碗を継いで用いることはあるが、茶入では行われないうがこれは誤りで、名物唐物等は割れても継いで使用すると述べ、補修に関する当時の通念にもふれている。茶碗には補修を施すが、茶入では行われないうとする器種による違いは、16世紀後半から17世紀にかけての茶会記において茶入の補修に関する記述が少ないことや、唐物茶入に対して補修痕跡を徹底的に隠す高度な補修技術が用いられたこと、補修痕に由来する銘をもつ茶道具の器種は茶碗が多いことなどにも関連していると思われる。18世紀代の文献史料には繕いに関する記述が多数見られ、織部をはじめとする著名な茶人に対する関心がうかがえる内容を含むものの、必ずしも肯定的な評価がなされていたわけではなかった。17世紀末の『茶譜』においても、金森宗和が茶道具に銀の銚を打つことを始めたが女の手道具のようであり、これを喜ぶものは「根本茶湯道ヲ取失コヘ成ヘシ」と厳しく批判している。言い換えれば、金森宗和が創始した銀の銚の利用が受け入れられていたのである。茶の湯が多様化するなかで、華美ともいえる銀色の金具が茶道具に取り入れられていたことは、金繕いを含む美的表現としての補修が普及、発展していく一つの要因になりえた可能性が考えられた。

『守貞漫稿』に、茶道具の補修では焼継ぎを行わず、漆を用いて補修し金彩を貼るとの記述があることから、遅くとも19世紀には金繕いが普及していたことが明らかである。ガラスの粉末を接着剤として用いる焼継ぎでは火を当てて加熱する必要があるため、高価な茶陶には行わず、金繕いが用いられるとされたが、食膳具にも施されるほどに普及していた。実見調査を行った新宿85遺跡(尾張徳川家下屋敷跡)出土の染付大皿には、焼継ぎにより割れを接着した後、継ぎ目に赤色の漆を塗り、金箔を貼り付け、金繕いに見えるように仕上げる特殊な補修痕跡が確認できた。色漆継ぎや金繕いにより補修痕跡を目立たせる場合、継ぎ目の部分をなぞるように細く色漆を塗ることが多いが、本資料では継ぎ目上に5mmから8mm程度の幅広に塗布している点でも異例であり、どのような意図で補修が行われたか不明であり、周辺資料を含むさらなる調査を要すると思われる。

生活什器の繕いとして焼継ぎが行われるようになる一方、金繕いは貴重な陶磁器に対する補修技法として継承され、近代の漆芸家が茶道具以外の文化財の修復を行う際に、金繕いを用いた例が確認できた。また、近代の作家による茶碗の制作において、金繕いは意匠として取り入れられた。以上のとおり近世以降の漆継ぎに関する調査を行ったことにより、現在は陶磁器補修が肯定的に受容される傾向にあるが、それは必ずしもわび茶の創始期の価値観をそのまま反映したものではなく、その後の茶の湯の多様化や茶人の再評価等による価値形成といった変化に影響を受けながら陶磁器の受容のあり方とともに発展した可能性が考えられた。

今後の課題として、地域による差異の検討が挙げられる。18世紀以降に開始された焼継ぎは、京都で始まり、次第に江戸で行われるようになったとされるが、本研究で調査対象とした漆継ぎ関連資料も主に京都や大坂、江戸の陶磁器補修の様相を示すものであり、都市部以外の消費地における実態を明らかにすることができなかった。また、生産地で行われた窯疵の補修など、茶の湯の影響によらない補修の展開についても検討を行う必要がある。今後、都市以外の地方における陶磁器の受容と補修の関係や、漆継ぎ以外の補修技法についても調査を行うことで、総合的な研究として発展させたい。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1．発表者名 巖由季子
2．発表標題 中近世の陶磁器補修 消費地遺跡出土遺物の漆継ぎを中心に
3．学会等名 東洋陶磁学会第3回研究会
4．発表年 2019年

1．発表者名 巖由季子
2．発表標題 江戸時代中期以降の陶磁器補修に関する調査報告
3．学会等名 工芸史研究会
4．発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------